



ベストティーチャーに聴く 授業の工夫⑤

鹿児島大学 FD 委員会

【発行／2021年12月】

鹿児島大学法文学部人文学科
准教授 酒井 佑輔



1 CBL (Community Based Learning (地域に根差した学び))

教育・研究を通して鹿児島の地域に関わることは重要だと考えています。また、鹿児島という地域そのものが学びの宝庫であり、そんな地域の豊かさを学生にはぜひ感じてもらいたいと思っています。そこで授業では、鹿児島の人との出会いや地域課題等をできるだけ盛り込むよう心がけています。具体的には、地域で活躍するキーパーソンをゲスト講師として招いたり、ときにはそうした関係者を授業に巻き込み、地域課題の解決に向けた取り組み等をすすめています。ただし、これらはあくまで「授業」という枠組みで行うため、学生の負担が大きくなってしまいうこともありました。地域側の期待が大きくなりすぎた結果、授業という範疇を

超えてしまいそれが学生にとって過度な負担になったことも。学生と地域とのあいだで信頼関係がうまく構築できておらず、齟齬が生じてしまったことも一度や二度ではありません。(実践事例については、QRコードより法文学部 HP にアクセスして、ご覧ください)



2 学生の主体的な学びをうながす環境の醸成

学生が主体的に授業に参加し、自ら問いをたて学ぶためには、学生と教員による対話や、失敗の許される学習環境が重要だと考えています。そこで授業では、アイスブレイク等を積極的に取り入れ、学生が発言・参加し教員と対話しやすい環境づくりにはげんでいます。近年では、匿名で授業中に発言できる respon やその他のアプリ等も多用しています。こうしたやりとりを通じて寄せられた学生による批判や提案等はできる限り真摯に受け止め、授業改善へとつなげるようにしています(ただし、学生の発言に傷つき悩み眠れなくなることもあるので、「就寝前に manaba を開かない」は鉄則です)。

例えば、グループワークやアイスブレイクの方法、授

業の進め方等は、受講生の声を都度聞いて、それらをできる限り反映させています。意見を踏まえて配布資料等の副教材も変更することが多いです。学生の要望によっては、専門分野に関する新しい研究成果や授業に関連する時事問題もできるだけ取り扱うようにしています。こうした方法で授業をすすめるため失敗も多く毎日が実験です。ここで書いたら怒られるかもしれませんが、シラバスの計画通りにいかないことも多く、学生以上に失敗しているかもしれません。



3 学習者相互の学びあい

知識やノウハウを一方向的に提供するだけでは、学生の多くはすぐに忘れてしまいます。また、自分自身の日常に引きつけてそれを考えたり、活かすのは難しいと感じています。

そこで授業は、主に反転授業 (flip teaching) 形式で行います。学習者には、文献購読や動画視聴、地域調査等の予習課題を課します。授業当日は、予習課題の理解の確認や、課題内容に関して問いを深めるグループディスカッションを中心に取り組みます。また、グループごとに議論内容を発表したり、私や他の学生と討論する場ももうけます。こうして学んだ内容を咀嚼して他者に伝えたり、理解できていないひとに気づき学習

者同士が相互に支える環境をつくることで、より深い学びが生まれると考えています。

以上、つらつら偉そうなことを書きましたが、授業自体は毎回実験で失敗ばかりです。逆に先生方から良い教育方法やアイデアがあれば教えていただきたいです。



21号

22号

23号

24号

25号

26号

27号

28号

29号

30号

ベストティーチャーに聴く授業の工夫⑤

鹿児島大学農学部食料生命科学科
教授 北原 兼文



1 はじめに

鹿児島大学に着任してから30年目になりました。農学部で「応用糖質化学研究室」を看板に掲げ、食品化学と生物化学を専門としています。研究室の歴史は、澱粉産業や発酵産業の盛んな鹿児島において、昭和41年当時の大学の機能強化として“糖質”に特化した2つの研究室が設置され、その1つの「澱粉利用学研究室」を引き継いでいます。これまで、研究室発足以来のメインテーマである

「地域糖質資源の特性解明と用途開発」を使命として、サツマイモを始め根菜類の糖質や糖質関連酵素の研究に取り組んでいます。

今回、ベストティーチャー賞をいただいた令和2年度は、新型コロナウイルス感染予防対策の混乱期でした。本稿では、万能な教授術の免許皆伝はできませんが、筆者の講義の実際について紹介します。



2 講義の実際について

座学の講義では、主に1年生の基礎専門科目「有機化学」と3年生の応用専門科目「植物性食品学」を教授しています。

「有機化学」は大学に入学して初めての専門科目で、前期、月曜日、1時限に開講されます。学生が学科の専門に興味を持つように、また自学の習慣をつけ、気軽に質問できる雰囲気作りを心がけています。パワーポイントの映写による講話に加えて、目に見えない有機化合物分子を実感してもらうために、大型分子模型の提示・回覧や、スマートフォンで使えるWebアプリケーションの「MolView」を使って立体構造を理解させています。また、演習問題を解くことにより解答力の向上と理解度の確認ができますので、複数人の学生にホワイトボードに解答してもらい答え合わせをします。演習への積極的な参加は評価対象にしていますので、我先に易しい問題の解答に走る学生や、珍解答を皆で解釈するなど、クラス全体の息抜きにもなっています。初々しい新入生にとってブルーマンデーとならないように気をつけています。

「植物性食品学」は研究室配属と就職活動を控えた3年生の講義になります。パワーポイントの映写とホワイトボードの板書、配付資料で進めています。やはりオーソドックスな板書は重要で、板書とともに解説する速度は、学生の理解とメモを取る速度に歩調が合うと思います。そして、アドバンス情報を含む補足資料を配付して向上心を引き出し、内容に興味を持つ学生からは質問を受けています。応用専門科目では、市販食品の現物や原材料を取り上げることにより、身近な食生活や卒後の就職に関わる学びであることを印象づけています。

新型コロナウイルス禍の令和2年度は遠隔講義の準備で多くの先生がご苦労なされたと思います。農学部では、FD委員長が多くのZoom活用法を教授会メールで配信してくれましたので大変助かりました。筆者は、遠隔講義に対応するために全てのパワーポイントの講義資料を見直し、フリー素材集の「いらすとや」を駆使して、文字情報と関連絵画で印象が残るように工夫しました。また、三密を避けた対面講義ではアクティブラーニングを控え、本学の学習支援ツールであるmanabaやresponを活用しました。

3 おわりに

学生からのアンケートを見ますと、「声が聞きやすい。」との評価を多くもらいます。いつの間にか身についた腹式呼吸により声が通るようです。決して能弁ではありませんが、明瞭な発音には気をつけています。

30年経っても教授術の奥義を極めることはできません。奇しくもベストティーチャーをいただいた令和2年度は遠

隔講義など新たな修行の始まりとなりました。教授術は常に深化と進化するものと心得ています。そのためには、学生の声を真摯に受け止め、自学に励み、同僚から学びます。このことに関して、筆者は今なお学生と同じ立場です。